

---

# 提督立志伝 外伝

ふじばん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

提督立志伝 外伝

### 【Nコード】

N3230E

### 【作者名】

ふじばん

### 【あらすじ】

提督立志伝本編では語られることのなかった物語をここに書きまします。提督立志伝の後日談やら裏側などなので、一話一話に話の繋がりはありません。提督立志伝本編を読んだ後に読まれる事をお勧めします。ちなみにこれは筆者の自己満足もいいところです。笑って読める方のみ、お進みください。

## 0 - 1 滑稽な将（前書き）

本編、「リーズ提督3話」にて、ペイマ地方がウエンデス海軍に強襲されます。その強襲に至るまでのウエンデス軍の思惑です。

## 0 - 1 滑稽な将

「ペイマで騒動を起こしましょう」

フェン提督は、フメレオン王に言った。

ペイマは、ファラス国境にある港町で、そこで騒動を起こせば、必ずファラス水軍は出てくる。

そこでノコノコでできたファラスの船を徹底的に叩き潰し、ウエ  
ンデス海軍の華麗なる緒戦を飾る。

世界にウエンデス海軍あり。その事実を世界に知らしめるため  
に……。

「ふむ……。うまく行くのか？」

「これだけの船です。事は容易い……」

「確かにファラス水軍ならいとも容易く下るであろう」

「陛下、お待ちください」

フェン提督は内心、舌打ちをした。

東の国から陛下に取り入って、近習まで上り詰めたこの車見仙と  
名乗る黄色い猿を、フェン提督は好きになれなかった。

陛下も陛下だ。

何を好んで、こんな汚らわしい猿を御前に置くのか……。

ウエンデス王家には、ウエンデスの貴族だけを配置していればよ  
いものを……。

「どうかしたか、車見仙？」

「このたびの戦いは陛下の大事な緒戦に当たります。あまり無意味とも取れる軽率な行軍は控えたほうがよろしいかと」

「だまれ、こわっぱ！！言うに事かいて無意味だど！？言ってしまえばこのたびの出陣はウエンドスの勢いを世界に知らしめるための戦い！近習風情が国を語るとは何事か！」

「……く」

確かに車児仙は近習に過ぎない。方やもう一方はウエンドスにおける大貴族。車児仙がいくら何を言ったところで、この男の発言に口を挟むことは許されない行為なのだ。

「陛下、その口が過ぎる猿を傍に置いておくのは陛下の品が問われますぞ！」

王家にとっても、厄介なこの男の身分。  
王に堂々と意見を述べることができるだけの地位を有している。  
この男を無下に扱ったが最後。何も準備できていない状態で、全ての貴族たちを敵に回し、王家は自壊しかねない。

まだ、このフェンという男を処断するには準備が必要なのだつた。

「それでは、陛下。私は出陣致しますぞ。ウエンドスにフェンありと、声高らかにファラス国民に知らしめてやるのです」

そう言って、フェンは退廷していった。

「車児仙」

「は……」

「主らしくもない。まだ決行の時ではないと言っていたのは主ではないか」

「すみません……。ただ、いやな予感がしましたので」

「予感？」

「はい……。我らにとっては事態を好転させられる機会かもしれませんが、そのためには犠牲が必要になることが……」

「どういう意味だ？」

「ファラスに我が国を警戒している男がいます」

「ほう？」

「名はリーズ水軍中夫。あの国柄にしては妙に先見の明が備わっている逸材かと」

「だがな、車児仙……。水軍中夫といえば、たがが一艦の艦長であるう？ そんなやつに何ができる？」

「おっしゃる事、もっとも……」

「いくら無能なフェンといえども、この優勢に抜かりがあったらそれはそれを理由に奴の権力を削ぐことができるが……。しかし、それはあの船が沈まない限り難しい問題だぞ？」

「御意……。さすがにそれはあり得ませんね……」

しかし、皮肉にも車兎仙の杞憂は的中した。  
たった一艦の最後の突撃に、旗艦が沈没させられる。

フェンは、この失態によってかつて先祖が築き上げた功績を、失墜させ、発言力を低下させた。

これが元で、リーズがウエンドスに仕官出来る土台ができたのである。

## 0 - 1 滑稽な将（後書き）

こうした土台の元、リーズはウエンデスに仕官できるわけです。

貴族の反対意見をフメレオンが押し切れた訳が、フェン提督の失態というわけで。

語り損ねた伏線回収と……。

あんまり、よろしくない回収方法ですね。 反省反省。



## 0 - 2 悪官の最後（前書き）

本編「リーズ提督 8話」で語られた車見仙の故国、円帝国の最後です。あんまり本編では重要視していなかった為、模倣編に舞台が切り替わるときの大陸の情勢説明の時、この国の名前がないため、「あら？」と思った読者様もいると思われましたので、ここに簡単に記載。

## 0 - 2 悪官の最後

帝位継承戦争と呼ばれる、ヴィンセント帝国で起こった次期皇帝を争った大規模な動乱。

周辺国家や、藩属国家はどちらかの支持を強制された。

かく言う、円帝国も、どちらかの支持を表明せざる得ない状況に陥っていた。

かつて、霸王と名乗る男が立ち上げた強大な国家も、ヴィンセント帝国に国威では負けており、従順な態度をとっていたわけではあるが、突如降りかかった難題に、実質、国の権力者である長項はどちらに着いたほうが利があるか、考えあぐねていた。

長項は現帝の教育係の宦官で、その立場を利用して国の宰相に収まったのだが、外交方面はやはり疎い。

こういう時、優秀な家臣団がいれば、戦局を見て正しい意見を長項にしただろう。

しかし、長項は自分の権力を維持するため、優秀な家臣を次々と粛清し、自分のイエスマンしか周囲に配置しておらず、的確な判断ができないでいた。

先帝の長男である三歳の幼帝ニグラウを擁立した一派に付くか。

先帝の末弟の現帝デュライを立てた一派に付くか。

「ニグラウはまだ赤子も同然。うまくやれば出し抜くこともできるか」

長項のだした結論であった。

ニグラウが、次期皇帝になるということは、政治を執り行うのは周囲の家臣団。その家臣団に取り入れれば、自身もまだまだ甘い蜜を吸えるというものだ。

かといってデュライは扱いにくい。

まさに絶対君主制とでもいえる統率であり、長項が取り入る隙がないから……、という判断である。

いまのうちにニグラウ軍に媚を売るため、物資の援助を行おう。

しかし、長項の思惑はうまくいかなかった……。

長い戦乱の中、圧倒的統率を誇るデュライ軍が、ニグラウ軍を撃破してしまった。

そうなると長項も焦る。

長項は、国を預かるべき宰相とは思えぬ行動を取った。

「この度のニグラウ支持は、我が主君、新帝（円帝国の皇帝）の独断によるもの。私はデュライ殿下の支持を推し進めたわけでありまして。全ての咎は新帝にあります」

長項は、デュライ皇帝の前で、円帝国のニグラウ支持を全て、自分の主君のせいにした。

「ほお？」

デュライは頬杖をつきながら、長項の言上を聞いていた。

「これに、円帝国が、ヴィンセント帝国に逆らわぬ証としまして、逆賊新帝の首をお持ちしました」

長項は、塩漬けにした元主君の首をデュライに差し出した。

「私はこれ、この通り、ヴィンセント帝国に逆らいし首魁の首を持って参上した次第であり、私を是非ともヴィンセント帝国の末席に加えていただきたく……」

「長項と申したな。 汝は、円帝国を余に差し出すと申すか？」

「御意でございます。 円帝国の全て、今このときより帝王様のものでございます」

「それで、そちは我が国で爵位を望むか？」

「爵位とまでは申しません。 末席に加えていただければと思っておる次第でございます」

「ふむ……」

デュライはそう返事すると不敵な笑いをした。

「確かに、円帝国はこのデュライがいたどころ」

「はは！」

「ただな」

「は？」

「余が最も嫌うものがある。 長項よ、そちには分かるか？」

「帝王様が最も嫌うことでございますか？」

「うむ……」

気付くと長項の周りには数名の兵士が立っていた。

「帝王様！？ な、何を！」

「己の立身出世のために、自分の主君を売る行為。余が困難にぶつかриし時、貴様は余を裏切り、別の強者になつくのは今回の件で明らかにされた……。それでも余の末席に加わりたいと申すか！」

「ひ……！」

「見るのも目障りだ！ とつとと殺してしまえ！」

兵士は剣を抜き、長項を後ろから切り捨てた。

「ぎゃあああああああああああああああああ……！」

「ち……。宮中が下衆の血で汚れてしまったか……」

## 0 - 2 悪官の最後（後書き）

円帝国のモデルは秦帝国。 長項のモデルは趙高。またそのまんまなパロディ

霸王とは、始皇帝みたいな人と思っただければ幸いです。

史実でも、悪宦官趙高は、自分の権力保身のため、自らの王を裏切ろうとし、前漢帝国の始祖、劉邦に内通します。 史実では、それが発覚し、王に処断されましたが、今作では、発覚せずに今回に至ったというわけです。

こいつ、気持ちのいいくらい救えない悪人です。 項羽と劉邦や、史記にこの男の事が載っていますので、興味のある方は一度拝読してみてください。

ある意味笑えます。

### 0 - 3 新白衆の給与

「そういえばリーズ提督。一度お聞きしたいことがあったのですが」

車見仙は、海軍省に帰ろうとするリーズを捕まえて聞いてきた。

「提督は新白衆を雇っておられますが、まさか無償で働かせているなんてことはありませんよね？」

「当たり前です……。そんなことできるわけがない」

「私が常々疑問に思っていた事はそこなんですよ。個人が諜報機関を維持することは難しいことです。かといってリーズ提督は海軍予算から新白衆に払うべき給与を請求していない。誰もが思う疑問だと思いますが？」

「海軍予算から請求できるわけないでしょう。ボク個人の私兵をまさか予算からとったらそれはもはや着服です。そんなことが公になったら、貴族どもが黙っていないでしょう」

「私兵と言い切りましたね？」

「突っ込むところはそこですか？」

「まあ、つまりは、新白衆はあえてウエндеス旗下には置かない……。そういうことか？」

「その通りです」

「なぜ?」

「なぜって……」

「新白衆はもはや海軍の正式な諜報機関であると内外に認められております。ですので、海軍予算から請求したところでだれも咎めませんよ?」

「車児仙殿、あなたも意地が悪い。私があえてウエンデス旗下に置かない理由……、なんとなく気付いているでしょうに」

「国の制約に縛られず動ける諜報機関、というわけですか」

「それに、ウエンデスには諜報部という、ウエンデス国家独自に機関もあります。一国に二つの諜報機関の存在を議会が許すと思いますか?」

「まあ、そうですね。実力、実績を考えれば新白衆に劣る諜報部は即時無用の存在として消えてしまおうでしょうね」

「そんなことになったら余計、戦乱の火種を生むものです。ただでさえ、存在意義を問われている諜報部が、新白衆のせいで潰されたら、諜報部はだれを恨むと思いますか?」

「まあ、新白衆を連れてきたリーズ提督でしょう」

「連れてきたってかなり語弊がありますね。ボクより先に新白衆はウエンデスにいたはずですが」



「世間の目はそうなっております」

「まあ、ボクに予先が向くのも勘弁してもらいたいね……。 かと  
いって多恵に向くのもどうかと思うし」

「余計な争いは好まずですか？」

「そういう事です」

「では、話を戻しますと……、新白衆の給与。 どんちゃって捻出して  
いるのです？」

「……………」

「リーズ提督？」

「車見仙殿、あなたは監査ですか？」

「まさか、そんなのは財務省の小役人がする仕事です。 私の場合  
はただの知的好奇心というわけですよ」

「知的、好奇心ねえ……………」

リーズはその場を去ろうとする。

「まあ、まあ、リーズ提督。 私は読者様の代弁をしているだけで  
すよ？ その読者様の疑問を解決させるため、私が一肌脱いだわけ  
です」

車見仙はニヤリと笑う。

リーズは車児仙のこの妙な駆け引きがやや苦手であった。

車児仙も、読者様が知りたいという大義名分のもと、強くリーズに解答を迫っていた。

「わかりました、わかりました……。 答えはボクの私財より出しています」

「私財？ まさか提督給金なんて微々たるもの。 そこから捻出しているなんて苦しい言い訳、私には通じませんよ？」

車児仙は、一枚の紙切れを出して、リーズにつきつけた。

「……これは？」

「一人辺りが一ヶ月食べるに困らない金額と、作中にでてくる新白衆の里の規模を考察した計算表に、リーズ提督が月々国から頂いているお給料の比較をした図です！」

「そんなもの用意していたのか……。 なんと暇な」

「そんなことはどうでもいいんです。 これをよく見て下さい。 提督給金と里の維持代、どう考えても里の維持代の方が桁違いに差があります。 さあ、だれもが納得の行くご解答を！」

「まあ、ファラスにボクが経営している金鉱があるわけで、そこから経費をつかしているんだけど」

「はあ？ 何その取って付けたような言い訳は！ そんな急造

臭い言い訳、誰が信じると思っているんですか？」

「いや、事実なんだって。そもそもフアラスは金鉱地帯であることは、作中で述べられているよね？　で、陛下から客将としてウエンデスに仕官するとき、領地安堵の名目で一つの鉱山を承ったんだよ」

「そんな現実離れた話で、私をケムに巻こうなんて1000年早いです。　さあ、真相を！」

「これが真正正銘の真相だって。　そもそも当時は貴族の連中もいたからウエンデスの目立つ位置で所領安堵されるわけには行かないだろ？　ボクは俗に言う外様ですよ」

「そもそもウエンデスに所領安堵がある事事態、初耳です。　そんな表記作中に登場していないはずですが？」

「筆者のふじばんは、あんまり物語に関係ない文章は省略する癖があるじゃないですか。　この辺りもまさに該当するわけですよ」

でなきゃ外伝なんか書きません。　（　筆者談）

「全く、取って付けた設定臭いですね」

「すでに話数だけはいっちょ前に進行していますからね、本編。　そう思われても致し方ないかと」

「で、それが最終解答で？」

「この期に及んで何を隠す必要性がありますか？」

「そうですね……。なんとなく、取って付けた感が否めないのも、話数が進行しすぎて今更説明しても嘘臭く聞こえるせいであると主張するわけですね？」

「そうですね」

「納得するだけでも？」

「納得してください」

「だがしかし、提督という多忙な職務を行いながら、金鉱の経営なんてやってられないのでは？」

「所有者はボクですが、きちんと管理している人がいるんですよ」

「どついつた間柄で？」

「陛下からの紹介だよ」

「……は？」

「当然、ファラスでも異端だったボクにそんな簡単に管理を任せろ事が出来る知人がいるわけない。困っていたボクに今の管理者を紹介してもらったんだ」

「ははあ、相変わらずとって付けた言い訳っばいですね」

「……否定しないよ。      とうか、いまさらじゃ何がどついつ

「設定でもとって付けた感があるんでは？」

### 0 - 3 新白衆の給与（後書き）

作中でもとって付けた感が拭えないとか散々ほざきまわっています  
が、一応設定はしとりました。

いつか本編で書こうか思っておりましたが、もはや時遅し……。

第一章、倭国動乱の模倣編が始まったんで書く機会がなくなりまし  
たので、ここに……。

物書きとしては失格ですね

## 1 - 1 召還、残された家族

「ネズミワールドの大観覧車爆発、乗客50人生存絶望的」

有名な遊園地で起きた大惨事。

その事件が起きて10日たったある日。

「……………そうですか。はい、はい……………。そうですね。いえ、大丈夫です。それでは……………」

山県組の事務所で肅々と仕事をする山県社長。

最愛の娘と、我が子同然の従業員の死をいまだに受け入れずにいた。

「穂波町の武田さんち、老朽化したから建て替えるそうなんだ。

鉄っちゃん、銀太くんと見積もりにいつてくれないかな？」

「……………」

「遙が学校から帰って来る前に出発してくれよ。じゃないと自分も行くと言って駄々をこねるから……………」

鉄っちゃんによばれた従業員は何も答えなかった。

「あなた……………」

「そうだ、今日の夜ご飯は銀太くんの好きなうな重にしようじゃないか。銀太くん、うな重ならいくらでも食べるからな」

「そろそろ銀太くんはこの仕事を任せてもいい頃合いかな。銀太くんも人を動かす事を勉強してもいい頃合いだしね」

「社長、見積もりに行つてきます」

鉄っちゃんとはばれた従業員は、一礼して出て行った。

チリリリン、チリリリン

「はい、山県組」

「私、ネズミワールド株式会社管理部部長の鳩山といます。この度はご愁傷様です」

「……………」

「それでお葬式に社長が出席したいと行っておりますので、お葬式の日程をお伺い……………」

「……………ふざけるな」

「はい？」

「何が葬式だ！ 貴様！！ 遙を返せ！！ 銀太くんを返せ！！」

「え、いえ、その……………、当方と致しましても、事故の原因究明に全力を注いでおります……………、決して観覧車があのような爆発を起こすことは有り得ないと」

「有り得ない、だと！？ 現に！！ 現におたくんこの観覧車が



爆発してるじゃないか!!」

「そ、それは、警察の発表の通りあの爆発はテロだと……」

世間では、観覧車爆発事故の原因はテロだと断定した。

では一体誰が何の目的で？

なんでも犠牲者の中に某大物政治家が孫と一緒ににお忍びで遊びにきて、それを狙われたとかなんとか……。

某大物政治家の死によってその政治家が所属していた与党は混乱を起こし、野党は、やれ対応が遅いなどと攻撃材料を入手し、意気揚々だ。

「ご遺族の気持ちを少しでも考えたことがあるのか！」

「犠牲者の無念、それを晴らすことこそが私の使命だと自負しております！」

野党は、私の気持ちの代弁だと声高らかに言う。

私がいっお前たちにそう言ってくれと頼んだ？

今回の事故であわよければ政権を奪取できるかもしれないという下心丸出しで、大義名分を得たようにピーチクパーチクウルサイ。

「遙……、銀太くん……」

私は認めていない。

あの二人が死んだなんて！

## 1 - 1 召還、残された家族（後書き）

まあ、政治批判ではありません。

なんていうか、やりきれない怒りと悲しみを誰にぶつけるか、というテーマのもと書いたらこうなったわけで……。

銀太らが召還された時期はまだ自民党が与党だった時期投稿していますが、ふじぱん自身、自民党は嫌いじゃないです。いつそ今政権持ってくる口だけの某党よりははるかにマシ……やめておきます。消されたくないのです。

なんだろう、こんな時間に来客のようです、それでは。

## 第二章第六話EF（前書き）

第二章第六話でクラブが本編と異なった選択をしたパターン。

第六話の視点はエルニエルでしたが、本話視点はクラブなので途中まで本編と同じ流れです。

## 第二章第六話IF

目の前に立ちはだかるのは自分の三倍はある巨大な鋼鉄の蜘蛛。手持ちの獲物と千冬の双銃でなんとかなる相手かという残念ながらNOだ。

それにこの獲物は使うわけにはいかない。

ファラスの爆炎という忌み名を捨てるためにここに来たんだ。

ファラスの爆炎という忌み名が風化するまで使うわけには行かない。

何もかも捨ててポシューマスまでやってきた意味をこんな早々に見切ってしまうていいのか？

限りなく否。

ファラスでリーズ兄に押しつけてしまった負担をここでも姉に押し付ける事になる。

そんな事はとてもじゃないが許容できない。

俺の獲物、爆弾を使うだけでファラスの爆炎、ポシューマスに健在と俺を追っている奴らの耳に届くだろう。

だから爆弾を使うわけにはいかない。

となると俺の手持ちの武器は護身用に身につけていた果物ナイフ大の短剣のみ。

一応、戦闘用に錬成されている短剣とはいえ、あんな鋼鉄でできた蜘蛛の肉を刺す事は叶わぬだろうが、肉弾戦に挑むよりは何倍もマシといったところか。

頭の中によぎるのはこれは最早アカデミーの試験ではないということ。

そりゃそうだ。

アカデミーは受験生を殺して何の得がある？

非難されるのが明白であんなものを配置する必要を全く感じない。そもそもこんな、ベテラン冒険者でも対処するのは極めて難し

い。

こんなのと戦い、何を計る？

無い、無い。

こいつはアカデミーにとってもイレギュラーともいえる存在だ。

さて、攻める手段がない。

向こうの力切れを目論んで逃げ回るのもいいが、先にこちらが力切れや判断ミスで被弾してもおかしくない。

今の所、五発ほど鋼鉄の蜘蛛の頭から発しているレーザーを避けている。

発射するまでのタイムラグがわかっているとはいえ、向こうの飛び道具は光速。

反撃出来るタイミングを見つけないければこのまま力尽きる。どうする……。

その時、蜘蛛の頭に威力の弱い魔法の弾がパンと音を立て、当たった。

あれはホーリーライトとかいう光属性の魔法だったか？

「私がこれを引きつけるから逃げて下さい！」

そう声を発したのはプリーストの戦闘衣に身を包んだ女の人。

こんなにタイミングよく、こんな場所に援軍がくるということは俺たちの試験官として俺たちを付けていたあろう人か。

さすがにあの年で教官ってことはないだろ。

教官にしては能力低すぎるだろうし、この場で勝算もなくノコノコでてるなんて未熟から来る愚は犯さない。

となるとあの人は試験官の手伝いかなんかしている先輩、ってところかな。

だが、無茶な注文をしてくださる。

逃げる？

それが出来るんならすでに離脱している。

あのビームをかくぐつてどうやって逃げる、っと？

「逃げれるならとうの昔に逃げてますよ、先輩」

あの蜘蛛に背中を見せたら即撃たれる。

鋼鉄の蜘蛛は先輩にターゲットを変更した模様。  
蜘蛛から発射されるレーザーは先輩に直撃した。

「！」

先輩の周りを覆っていた光の壁らしきものはパリンと、割れる。

あれはある程度のダメージ量の物理攻撃を無効にするバリアで確かキリエイソンとかいう教会系の防壁魔法だったか。

あれは術者の魔力と被術者の防御力に比例して防壁の層が厚くなる典型的な術。

あの先輩、一撃だけとはいえあのバリアを耐えられるだけの防壁を張れるのか。

だが、あの魔法はかなり魔力を消耗すると聞く。  
いずれ力尽きるのは目に見えていた。

なら、魔力を外的要因で回復させればいい。

俺の手持ちに、魔力を回復させるアイテムもある。

瓶に入った一般的な魔力回復アイテム、青い水と、その青い水の原料を粉末にして爆弾に詰め込んだ俺命名の青い爆弾。

回復量は青い水の方が高いが、青い水は飲まなければ効果を発揮しない。

しかし青い爆弾は、爆発して飛散した粉を呼吸と一緒に体内に取り込む事ができるので、その飲む為に費やす時間を考慮すると、やはり青い爆弾の方が効率がいい。

が、青い爆弾を使用するのには問題点が一つ。

青い爆弾を使用する冒険者は冒険者多しといえど、ファラスの爆炎と呼ばれた冒険者くらいなものだ。

つまり使えば知っている人にはばれる。

それはマズい。絶対ダメだ。

先輩は改めてキリエイソン、防壁を張る。

が、張った後に見える疲労感。

つまり後、だいたい三回貼ればいいほう、か。

先輩が力尽きるのはこのままでは後ちよつとだ。

どっちにしる魔力回復は急務。

「先輩！」

そうして俺は先輩めがけて瓶詰め of 青い水を投げた。

「へ？」

先輩は先輩めがけて投げつけた青い水に気付いて手を伸ばそうとするが、蜘蛛は再び先輩めがけてレーザーを放った。

「きゃああああ!？」

先輩はバリアに護られているとはいえ、相手の攻撃は先輩のバリアを一撃で破壊するほどの火力。

先輩はバリアが碎かれると同時にレーザーの火力を相殺した際に生じた衝撃波によって尻餅をつく。

そのラグのため、先輩めがけて投げた青い水が入った瓶は、パリッと、先輩の手前で割れてしまった。

「げ………」

俺らがその事実を認識し、一瞬止まってしまった隙を好機と見なした蜘蛛は、第二射を先輩めがけて放つ。

「しまっ!？」

一瞬の油断。

先輩のいた箇所はクレーターができており、先輩の姿はどこにもなかった……。

「う、うそだろ？」

明らかな俺の判断ミス。

ファラスの爆炎を隠したいという俺のいらぬ意地が、かなわな  
いとわかっていながら助けにきてくれた先輩を見殺しにしてしまっ  
た。

なんとかする手段はあったのに、俺のへんな意地のせい!

「クラブさん!!」

「え?」

千冬の声で我に戻るが、これは既に時遅し、というのか……。  
蜘蛛の目は俺を捉え、レーザーの発射準備を整えていた。  
回避はもう絶望的。

「ごめんな……」

最後の言葉だった。



b  
a  
d  
e  
n  
d  
.....  
o

## 第二章第六話 I F（後書き）

いや、某ノベルゲームに触発されました……。

もはや外伝が提督立志伝ならなんでもありになってきた……。

ちなみに I F への分岐はさくつとばれてますでしようが、本編では青い爆弾、I F では青い水の入った瓶を投げています。

そこからの分岐でこうなってしまったというわけです。

書いてみて思ったことですが、クラブ、お前綱渡りすぎる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3230e/>

---

提督立志伝 外伝

2010年10月10日02時31分発行